

**Noel Streatfield 著 *The Growing Summer***  
**にみる詩の果たす役割**

稲 田 依 久

**A Role of Poetry in *The Growing Summer* by Noel Streatfield**

Iku Inada

抄 録

現代の子供達にとって無縁のものとなったかにみえる年輩の家族成員、家庭教育の意味を考えなおすうえで大いに示唆的である児童文学作品 *The Growing Summer* において、詩が子供達の教育にどのように貢献しているかを概観する。

**キーワード：**児童文学、詩、家庭教育

(1998年9月16日 受理)

**Abstract**

In *The Growing Summer* by Noel Streatfield poetry is effectively used to illustrate the personality and characteristics of Great-Aunt Dymphna. This paper introduces some of the poems she recites in the story and discusses the role of poetry in *The Growing Summer*.

**Key words :** children's literature, poetry, education at home

(Received September 16, 1998)

## I

子供たちが世代を異にする年長の親族と生活を共にすることで得るものの大きいことは、実生活のなかで、また文学作品のなかでこれまでも語られ、実感されてきたところである。この目新しくもないテーマを殊更に取り上げようとするのは、現在の核家族化、少子化のすすんだ社会で、親子以外の成員がいる家庭生活とはどのようなものでありうるのか、また親子二世世代しかいない家庭にあつての親の役割を考えるうえでなんらかの示唆を与えてくれると思われる児童文学作品があるからである。そのような作品のひとつに Noel Streatfield 著、*The Growing Summer* がある。この作品は大伯母と子供たちが価値観の相克を互いに乗り越えて、子供たちは自分のことは自分ですという自立を学んで身につけ、大伯母はそれまでの長い一人暮らし年月のあいだ自分に禁じていたかのような感のある優しさを子供たちにたいして表現することを自分自身に許す、という子供たち、大伯母双方の成長が描かれた物語である。ここでの大伯母の性格設定、描写の要となっているのが彼女の詩、ことに子供のための詩、への傾倒である。そこで、一風変わった人物としての大伯母と詩との関連性を分析する上で、まず、イギリスにおける子供たちのための詩の位置付けを考える。ついで物語中の子供たちと大伯母との接点でありまた紛争点でもある詩が、物語のなかでどのような役割を果たしているのか、またそれが大伯母の人物設定とどのように関わっているのかを考えてみたい。

## II. 子供たちのための詩のイギリス社会、家庭における位置付け

Matthew Arnold が *Essays in Criticism* のなかで、“By nothing in England is so glorious as by her poetry”、と書いているようにイギリス文学における詩の位置付けは高い。齊藤勇が「イギリス文学史」に、「Plain man は・・・どちらかといえば散文的・・・ともすれば詩的想像にかけている実務家にすぎないかのように誤解されがちである。・・・イギリス人は秩序を守り法則を尊ぶとともに、その秩序と法則とを徐々に、絶えず改めながら、独立自由の精神を発揮してやまないの、常識に富み実行力に長じているのみならず、彼らの間から、驚嘆すべき独創力と想像力とを特徴とする偉人が輩出した」(pp. 1-2)<sup>1</sup>としてイギリス人の詩的創造力を評価している。殊にイギリス人の文学的表現としての“humour”、これを齊藤勇は「胸中おだやかならぬものを感じながらも心のゆとりとうるおいとを湛えている表現」(p. 3)と説明しているのであるが、この“humour”を大切にする姿勢を強調している (p. 2-3)。これはいわゆる国民性であり、その言語における表現の特色、言い替えれば言葉の喚起性の特徴を、平野敬一は「生活基盤そのもの、広義の『文化』から生まれてくる」(p. 5)<sup>2</sup>特徴で、さらには「個人の生活体験をはるかに超えた民族の集団的無意識」(p. 6)であるとすらいう。この“humour”の伝統、「心のゆとりとうるおい」は文学の範疇においてのみならず、当然日常生活の中においても評価されていたにちがいない。(原田、原 pp.181-182)<sup>3</sup>

その伝統、評価の表現の一つに「子供の心をしっかりと捕えた歌」(藤野紀男 p.10)<sup>4</sup>し

かも「大人の心のなかにちゃんと生きている」（藤野 p.10）マザーグースがあるといえよう。マザーグースはこれがイギリスで出版されたといわれる18世紀中頃（平野 p.28）は、*The Oxford Book of Children's Verse*<sup>5</sup>の前書きによると、それまでとは異なり、やっと子供が現在の子供の位置に到達した、即ち食事や文学でおとなとは違った特別の待遇を受ける者であると認識されるようになった時代である（p.viii）らしい。この時代はその名称がそのまま道徳的偽善性を意味する Victoria 朝であり、その本音と建て前を使い分ける、「世間の杓子定規的きれいごと趣味」（平野 p.186）、表向きには道徳を重んじる社会風潮のなかで、「子供達をおもしろがらせ、ねむらせるように」（平野 p.29）という、子供達のための詩という本来の目的がある。本来の目的という点からは、音声面での心地よさ、文学的伝統としての詩の形式、韻律のもたらす言語感覚の快さが味わえる。しかしながら、時代同様、表向きの存在理由に加えてその背後には内容面でのナンセンス・ある種のでたらしめの楽しさを無条件に味わうとという楽しみがある。これを平野敬一は「抗毒素」（p.184）と表現している。この内容に関しては、本音の発露の場、冗談のなかの真情・真実の表現、さらには「<rhyme without reason>」（高橋康也1981 p.179）<sup>6</sup>、詩としての形式上の理由は整っているが内容という論理的存在理由はないという「ノンセンス」（高橋1981 p.14）、さらに「日常の論理をひっくりかえしたノンセンスじゃなくて、その論理を日常性が夢想もしないほど馬鹿正直に受け入れてみせることによって、ノンセンスに変じてしまう」（ユリイカ 対談 p.102）<sup>7</sup>という形式は約束通り規範に則って、内容は非論理的であったり非道徳的であったり意味をなさなかったりという、本音と建て前が逆転した状態を、社会、道徳、規律、因習と個人との関係の逆転として、表裏一体でありうることの表現となったのだと思われる。

それではこのような文化、伝統としてのマザーグースに代表される子供のための詩が子供の教育上どのような意味をもちうるのかを考えてみる。先にも書いたように子供のための詩は「子供達をおもしろがらせ、ねむらせるように」という日常生活に彩りをそえたり、生活時間の配分の工夫の産物であったことは想像に難くない。そのような詩の特性として、耳に心地よい音、反復、リズムといった音声的特徴を備えていたことから、繰り返し聞かされたり、また自身で繰り返し暗唱することで、英語という母国語の詩の特徴を音として身につけることができる。また脚韻、頭韻といった押韻法、韻律や連といった詩の形式についても同様である。加えて文化面からは「発想の原型」（平野 p.184）といわれるようにイギリス国民の思想的、民族的特徴を無意識のうちに、学問や勉強といった形式をとらずにごく身近な日常生活のなかで獲得、継続できるのである。これは逆にマザーグースなどの詩の側からいえば、谷川俊太郎が「国民全体の感受性全部にわたる普遍性を獲得」（ユリイカ p.111）しているといえる。これは高橋康也がビートルズに関していみじくも看破して言っているように、「イギリスの文化構造を上から下まで縦に割っている」（ユリイカ p.118）というのと同じであろう。即ち、一般民衆が大切に受け継いできた文化は、どの階級にとっても価値がある、学校教育以外の民間伝承も立派な教育たりうるという考えに結びつく。国民性としてイギリス国民に共通する文化である。これは同時に、詩の側

からいえば、谷川俊太郎が「自分の個性でことばが選択できなくなる」(ユリイカ p.114) ということの、また高橋康也が「形式があって、そのなかで自由になる」(ユリイカ p. 114) と言っているように、変化させることのできない定型として、詩の歴史に定着するということになる。この文化的特徴がさらには教育の範疇にも影響を及ぼしている。先に述べた学校教育以外の民間伝承も立派な教育たりうるという考え方が、「官僚主義に対する抵効力が伝統的にとても強い」(ユリイカ p.114) という高橋康也の意見に結び付くこととなる。またもっと具体的な教育の場においても、論理展開、文章作法上の形式を重視する作文を書くことが要求されるいっぽうで、荒唐無稽とみえるような内容の詩を楽しむこともまた当然とこととして要求されるという<sup>8</sup>、矛盾しているかにみえる二つの価値観をひとりの人間が受け入れることを体験するのである。最後に、生涯にわたって保ち続ける財産としての子供のための詩は、世代や時代といった時間性をこえたところですべての人々を平等にすることができる。たくましくして個人というひとりの存在の平等性を知らせてくれる。これはまた考え方によっては、子供のための詩は、いつも同じ内容で同じ感興をあたえてくれるものではあるが、各々の年代でしか味わえない内容を持っているという、即ち生きていくことは絶えず経験し、蓄積し、また失ったものをも知る学びのプロセスであるということを知ることになるのである。

*The Growing Summer* では子供のための詩をほとんど知らずに大きくなってきた四人の子供たちが、一夏を父方の大伯母がひとりで住んでいるアイルランドの片田舎の古い家で過ごすうちに、いくつもの詩を学ぶことになる。四人の子供たちはこの一夏で自立、自分のことは自分ですという社会生活の基本を大伯母から学ぶのであるが、この大伯母はかなりの変人であることになっている。そしてその変人ぶりの表われのひとつが彼女の詩への傾倒である。以下に子供たちの大伯母、Great-Aunt Dymphna、と詩が *The Growing Summer* のなかでどのような役割をはたしているのかを物語にそって論じる。

### Ⅲ. *The Growing Summer* に於ける詩の役割と位置付け

子供達の大伯母 Great-Aunt Dymphna は、第二次世界大戦勃発まではフランスで小さな学校を経営していた (P.26) が、対戦開始と同時に石炭輸送船で小さな鞆一つを持って出国 (p.36, p.101)、イギリスに着いて直ちにアイルランドの南西部、コークの片田舎に移り住むようになった (p.26)。大戦の爆撃で兄弟 Alfred (子供達の祖父にあたる) とその妻 Lily を失った彼女は、かつては壮麗な大邸宅であったがすっかり古びてさびれてしまった家に普段は一人で住み (p.27)、夏の間は孤児になった甥、即ち四人の子供達の父親 John を一緒に住ませた (p.27)。日頃は没交渉であった大伯母 Dymphna は子供達にとっては「伝説」(p.26) の人であり、「実在の人物というよりは本の中の登場人物のよう」(p.26) であった。その大伯母の様子が少しずつ子供達にも分かってくるようになるのは、子供たちの母親が夫の看病にアジアのある国にでかけることになり、その間、子供たちを彼等の大伯母に預けることとなり、母親が連絡をとろうとする。しかし彼女とは電報でしか連絡がとれないことから電話のない生活をしていること (p.33)、電話をかけ

たり買い物をするためには12マイルもはなれた **Bantry** の町にでかけなければならないこと (p.41) が明らかになるにつれて大伯母の存在はますます奇妙で不可解なものとなってくるのである。

実際に会った大伯母は、子供達の想像通り、或いは想像をはるかに超えて、不思議で不可解な人物であった。服装は、黒いケープをはためかせ、黒いワンピースに男性用のツイードの帽子、ゴム長靴というもので、大きな黒い鷲 (p.44) のように見えた。車の運転ぶりは無謀で、道路で見かけるジブシー以外の人間は評価に値しないと眼中にないが犬や牛などの動物達にはその理性を評価しての注意をはらう (pp.45-46)。またカモメと話をすることができ、子供達の父親の容態もカモメから聞いている (p.46, p.83, p.127) という。この風変わりな老女性の生活ぶりは、住んでいる家が大きく、外観は壮大だが (p.53) 中は埃が積もり、床にはあちこちに本が積み上げられているみすばらしい古い家で、壊れかかったような家具がわずかにあるだけ (p.64) で、手入れが行き届いていないが故に庭も草原のようであり (p.47)、灌木も茂るがままに放置してある (p.65) という家 **Reenmore** に象徴されている。電灯の代わりにローソクの灯火 (p.49)、食料はキノコ (p.55) や魚など自分自身でとったものしか食べず (pp.57-58)、肉は不健康な食べ物であるとして決して食べず (p.58)、紅茶ですら毒だ (p.57) と考え、薬も自分自身で調達、調合 (p.26) しているように前近代的な生活習慣を頑迷に守って生きているのである。時刻を知る必要はなく、時間を気にすることもない (p.152)。彼女にとっては現代的物質的な豊かさは何の意味もないようである。

そのような大伯母 **Dymphna** がこだわりをみせるのは、上記の食べ物、動物、古い家に加えて、詩である。その日常の話しぶりにも、繰り返し、頭韻、倒置といった詩作上のテクニックが頻繁に用いられる<sup>9</sup>のであるが、普段在宅することが少ない大伯母の子供たちとの接点として、子供向けの詩が活用されている。以下に大伯母と子供たちの出会い、関係の展開上重要な場面における詩の用法を、物語にそって概観する。

#### A. 大伯母 **Dymphna** の詩への思い入れと彼女の内面の紹介

子供たちが **Reenmore** と呼ばれている大伯母の家に到着した翌日、子供たちが大伯母のことを気がふれているのではないかと、魔女、吸血鬼ではないかと考えて、まだ近づき難く思っているときに、長女 **Penny** が家のなかを見て回っていて大伯母に出会う。このとき **Penny** は埃っぽく、蜘蛛の巣がかかり、家具とってはぐらついた小さなテーブルとがたがたした台所用の椅子しかないみすばらしい部屋にいた。すると突然背後から大伯母が詩を暗唱する声が聞こえる。

“Two old chairs and half a candle——  
One old jug without a handle, ——  
These were all his worldly goods :  
In the middle of the woods,

Of the Yonghy-Bonghy-Bo.” (p.63)

(“The Courtship of Yonghy-Bonghy-Bo” by Edward Lear)

大伯母は自分の家の状況がこの詩に描写されている男性 Yonghy-Bonghy-Bo の家と同じであると示唆しようとして上記の一連を暗唱したのである。Yonghy-Bonghy-Bo が二脚の椅子とローソク半分、持ち手のとれた水差しひとつしかない森の中の家に住んでいると本文に繰り返し出てくるのである。

“On the Coast of Coromandel

Where the early pumpkins blow,

In the middle of the woods

Lived the Yonghy-Bonghy-Bo.

Two old chairs and half a candle——

One old jug without a handle, ——” (p.65)

が Penny は大伯母がその詩の一節でなにを言おうとしているのか見当もつかずにいる。その様子を見て大伯母が、「子供の教育はどうなったのか。お前は文明の果てから来たのかい」(p.63) と言うのである。ここには大伯母の教育観、子供は家庭で詩を身につけるべきである、が明らかである。さらにこの点は大伯母の言葉、「ジョンや、ジョン。お前は一体どうなってしまったんだい。お前の子供にこの詩も教えなかったのかい」(p.63) と自分の甥であり子供たちの父親であるジョンを引き合いにだして嘆くところにも明らかである。ここで大伯母が嘆いているのは、単に詩を教えていないという点ではなく、詩のように家庭教育には欠かせないものを教えていないのなら、子供の教育が行き届いているはずがない、という点にまでその非難はひろがっているのである。

しかし大伯母は単に家庭教育が行き届いていない点にのみ言及したのではない。彼女は自分自身の状況が Yonghy-Bonghy-Bo と同じである、即ち古くてみすばらしい家、豪華な家具どころか真っ当に使える家具すらない家に住んでいること、またさらには Yonghy-Bonghy-Bo の詩の後半は、彼が女性に受け入れてもらえず寂しい結末となるのであるが、その部分にまで大伯母は言及しようとしていたのではないかと思われる。というのは大伯母は第二次世界大戦によって、フランスでの学校経営という仕事を失い、兄弟とその妻も失っている。大切に思っていたものを次々に失った彼女は Yonghy-Bonghy-Bo と同じく孤独であり、人生に希望を抱けずにいるのではないだろうか。大伯母は自らの境遇を直接語ることはせずに、Yonghy-Bonghy-Bo の状況に重ねて暗示することで子供達に心配をかけることなく、また憐憫を与えられることもなく、自分自身の生き方を全うしようとする意志を自己確認しているようにもみえる。

B. 子供達の分別、都市型の生活からでてくる質問への答えとしての詩

子供達が大伯母の家 **Reenmore** に到着した翌晩、子供達に対して身分を偽って同情をひき、**Reenmore** に匿ってもらうことになった **Stephan** の夕食の皿を片付けるために、夜遅くなって台所に降りてきた長兄 **Alex** が、ちょうど帰ってきた大伯母と会う。彼女は自分で摘んできたキノコを料理し始める。**Alex** はキノコなど採って食べたことがないのでキノコに関する知識がなく、大伯母は毒キノコを食べようとしているのだと誤解して彼女に笑われてしまうのである。その後 **Alex** は彼にとっての現実的かつ重要な質問をする。それは、その日の昼間、近くの小さな食料品店で彼は買い物をしたのだが、食料を買い続けるとすぐに手持ちのお金がなくなることを実感して、大伯母にツケで買い物はできないのだろうかと言ねる。その時キノコを炒めていた大伯母は次の詩をもって **Alex** への答えとするのである。

“Down along the rocky shore

Some make their home——

They live on crispy pancakes

Of yellow tide-foam ;”(p.83) (“Up the Airy Mountain Down the Rushy Glen”

by William Allingham<sup>10)</sup>)

この詩は“**The Fairies**”のなかの一つである。アイルランドには妖精が住む (p.95) と子供達に公言してはばからない大伯母にふさわしい引用である。彼女にとっての生活とは、妖精も共に住んでいる世界で自然に即して生きることを意味している。食べられるキノコを見極めて、自然から分けてもらって、摘んで食するのが彼女の生き方なのである。その大伯母を選んだこの詩は、前日、食事はどうすればいいのかと子供達が大伯母に訊ねたおり、彼女が「魚は海に、テナガエビは湾に。・・・自分のことは自分で。出かけてくるからね。」(pp.57-58) といったことに関連しているのである。大自然のなかに妖精も動物も、そして人間も住んでおり、その中で魚は海に、エビは湾に住んでいるのである。子供達は自然の恵みを有り難く頂けばいい、自分達にできる方法で、自分達に必要なだけの食料を、手に入る種類、分量だけ捕ればいい、という自給自足を助言するための引用なのである。大伯母には食料となる魚・エビも、彼女の仲間である動物・昆虫も、そして妖精までも人間と同じこの自然界に住んでおり、自然はすべてを受け入れ、与えてくれる存在であることを彼女は教えてくれていると思われる。

**Alex** に対してと同様、長女の **Penny** の質問にも大伯母は詩で答えている。**Penny** は三人の兄弟妹のために母親がわりとして食事の世話、部屋、ベッドの掃除整頓、入浴など毎日の生活に細かく気を配っている。料理はそれまでの経験があまりないことから決して上手ではないが、できる限りの努力は惜しんでいない。が、洗濯に関してはあまり気が進まないでいた。というのは、水道の栓をひねると茶色い水がポタポタでるだけといった有り様で洗濯すればかえって衣服やシーツが汚れるのではないかと思われたからであった。が、

ある朝早く Penny は大伯母が雨水で洗濯したシーツを木に掛けて乾かそうとしているのを見て (p.151)、乾いたあとにかけるであろうアイロンはどこにしまってあるのか (p.152) と訊ねる。その時大伯母は、「シーツには太陽と風さえあればいい」 (p.152) と言って次の詩を引用する。

Gold is for the mistress—silver for the maid!

Copper for the craftsman cunning at his trade.

“Good!” said the Baron, sitting in his hall,

But Iron—Cold Iron—is master of them all. (p.153)

(“Cold Iron” by Rudyard Kipling)

これはアイロン (iron) のことを歌ったのではなく、金属の鉄 (iron) のことを歌った詩である。大伯母は Penny に「お前は心配しすぎる。いつも心配そうな顰めっ面をしているか、時計を見て時間を気にしている」 (p.152) というように、Penny が現代文明の価値観、論理、分別にふりまわされていることを快く思っていないのである。これは Penny への非難というよりはむしろ自然に身を委ねて生きる喜び、幸せを知らないことを憐れに思っているが故であると思われる。大伯母は先の言葉に続けて、「アイルランドでは時間など問題にしない。時間など知りたいとも思わない。道理にかなっているだろう。時間など気にする必要はないのだから」 (p.153) という。これを知らせるために大伯母はあえて掛詞、アイロン (iron) と鉄 (iron) の意味をずらして Penny の分別を揶揄し、論理を混乱させるのである。しかしながら Penny の分別はそれくらいのことで容易になくならないのである。Penny は「ロンドンでは時間が物事を決定するし、それに慣れているから急には時間を無視できない」 (p.153) と反駁する。

言葉では Penny を納得させられないと分かった大伯母は、今度は行動にでる。「お前に時間をあげよう」 (p.154) と言って、大伯母は Penny の手をとって走る。時間よりも早く走って一分を稼ごうというのである。これはマザーグース的のノンセンスそのものといえる。時間は一秒一分きまった速度で過ぎる。それなら時間よりも早く行動すれば時間に先んじることができる。ありえないことが論理のうえでだけは成立する、その論理を採用してみようというのである。しかも皮肉なことに、ここで大伯母が用いている論理は Penny が支持している現代文明、分別がその拠り所としているもののなのである。

残念ながら上記のいずれをもってしても Penny を説得することができないのである。Penny は「なんて馬鹿げた人なんだろう。・・・もっと真つ当な人ならいいのに。たった一人の伯母さんがこんなに変な人だなんて」 (p.153) と嘆くのである。Penny にはまだ大伯母の価値観が理解できず、当然彼女の言葉も行動の意味も理解できないままである。これは一つには世代の違い、またロンドンという都会とアイルランドの片田舎という地理的、生活習慣的距離、またこれまで全く没交渉で過ごしてきたという物理的・時間的隔たりの結果であるといえる。がもう一つは Penny が学校の勉強はしてきていても、Edward



Lear も Rudyard Kipling も William Allingham も、さらには恐らくマザーグースの詩も多くは知らないであろうという事実、即ちイギリスの国民性に根ざすと同時にその国民性を作りだし続ける伝統文化を身につけていないということがその理由の大半を占めると推察できる。言葉自体の、字義通りの意味は理解できてもその言葉の背景、暗示するもの、味わいといった領域の理解は、日常家庭生活のなかで、生活の雰囲気とでもいうべき文化の根幹を支える知識、伝統の共有、継承、また創造によって可能となるもののようである。

### C. 言葉、英語の言語感覚の教育としての詩

子供達が *Reenmore* に来て三日目の雨が降った日、Penny の努力でありったけの鍋で湯を沸かして Naomi が入浴する。Robin が入浴している間、Naomi が階下の台所でひとり待っている時に大伯母が突然現れる (p.93)。大伯母は雨の日にはじっとしては駄目だ、と言って、秘密を見せようと Naomi を誘う (p.94)。Naomi は大伯母を魔女、吸血鬼ではないかと思って恐れているので、魔女なら雨など気にもならないはずだと思って、思わずそう言ってしまう。が大伯母は Naomi の気持ちなどは頓着しない様子で、どうしてそう思うのかと Naomi に問い返す。そこで Naomi は魔女だからとも言えず、伯母さんは雨靴をはいているからと答える (p.94)。そこで大伯母が次の詩を暗唱する。

Great-Aunt Dymphna went to Gloucester. . .

All in a shower of rain.

He trod in a puddle,

Right up to his middle,

And never went there again. (p.94)

これは“Doctor Foster went to Gloucester,”というマザーグースの詩をもじったのである。大伯母がこの詩を引用したのは Naomi が雨靴といったことから、上の詩の「雨降り」が連想され、それが雨靴をはいた自分と重なった故であると考えられる。雨降りといえば当然想起される詩という伝統的言語文化の知識である“Doctor Foster went to Gloucester”なのである。Naomi はこの詩を知っており、大伯母の設定した言語文化の基準に達していることを証明する (p.94)。Naomi はこの一次審査にパスしたのみならず、大伯母をさらに喜ばせもする。それは大伯母が自分の名前を詩に入れ込むことで、上の詩が押韻の規則から逸脱していることを Naomi が指摘したからである (p.94)。即ち“Foster”と“Gloucester”の二語が、さらには“Doctor”も含んで、脚韻をふんで原詩は構成されているのに大伯母の名前“Dymphna”と入れ替えることで“Gloucester”と脚韻をふまなくなり、詩としての形式を崩すことになってしまったことを指摘するのである。加えて、脚韻で詩形を整えるためには“Gloucester”という地名を他の地名にする必要があると Naomi は大伯母に助言する (p.94)。Naomi のこの指摘、助言はいたく大伯母を喜ばせ、その喜び故に大伯母はスキップまでする (p.94)。このように彼女は心身が呼応し、純粹・無垢な心根の表現

は古代人のように率直である。<sup>11</sup> Naomi の詩への理解を知った喜びをスキップして表現する大伯母は、詩への傾倒、純粹な愛着を文字どおり身体で現わしている。そしてこの喜びには彼女にとって大切な詩を理解する Naomi への好意も見られる。

大伯母は続いて“Great-Aunt Dymphna went to Gloucester”の部分に異なる地名をいれて、このもじった詩の脚韻を整えようと Naomi と言葉のゲームを始める。先にいい地名を思いついたほうには賞品を与えよう (p.95) ともちかける。これは当初、大伯母が目論で意図したような Naomi を試そうとしての審査、試験としてではなく、マザーグースの詩を身に付けており、詩の形式というものを理解している Naomi を仲間として認めたいという楽しみとしてのゲームであろうと思われる。Naomi のほうも、それまでは魔女、吸血鬼ではないかと疑って恐れていた大伯母の手を思わずとって、「座りましょうよ。走っていたのでは考えられないから」(p.95) とゲームに乗り気であるところをみせる。詩が大伯母、Naomi の双方からの歩み寄り、親近感の深まりをもたらしているのである。共通の知識、話題、興味がそれまでは全く理解しようもないと思われた二人を近づけたのである。そしてこの脚韻ゲームは大伯母が先に言う“Bologna”という地名で彼女の勝ちとなるのである (p.95)。詩のおかげで大伯母への恐れを忘れた Naomi は、それまでは口をきくのも、まして反対意見を言うのもはばかれていたというのに、この時は「前から分かっていたのね。ズルをしたのね」(p.95) と大伯母にくっつく。ここでの Naomi はそれまでの臆病者ではなくなっている。詩が二人に理解をもたらしたと同時に Naomi には恐れを克服させもしたのである。

他にも詩が言語感覚の教育として役に立ち、かつ大伯母と子供達との距離を縮めた例がある。ある日子供達が昼食を食べ終わったところに大伯母がやってきて、「セールに行こう」(p.1076) と言う。Penny はこれを聞いて「船に乗る」ことだと思ふのであるが、そして海が荒れているであろう天気に船に乗るなんてと言う気持ちを表す (p.106)。この誤解に対して大伯母は次の詩をもって答える。

And everone said, who saw them go,

O won't they be soon upset, you know! (p.107) (“The Jumblies” by Edward Lear)

これは Edward Lear の“The Jumblies”という詩で、ざるの船で海にこぎだすというもので、上の一節にもあるように、それではすぐに沈没してしまうと誰しもが思うものである。この詩を引用した後、大伯母は Penny に「船に乗る」セール (sail) ではなく、「売り出し」のセール (sale) であると説明する。これは Penny の心配性、大伯母はこれを「いつも眉間に皺をよせている」と言うのであるが、からセールがすぐに危険な海、船と結びついてしまったことへの揶揄でもある。ここに大伯母の教育的意図、言葉は多義性を有している、即ち自分の関心事のみからの思い込みで言葉の意味を決めつけてはいけないという意図をみることができる。

この後、四人の子供達と大伯母は納屋で開催されているセールに出かけるのであるが、会場に向かう車の中で大伯母は詩のしりとりゲームをしよう (p.112) と提案する。それは詩の一行の最後の単語の初めの文字で、次の詩を始めていくものである (p.112)。これには先ず多くの詩に関する知識が必要であり、ついで単語の綴りを知っている必要がある。考えようによっては退屈な勉強ともとれる行為でもあるのだが、目的地につくまでの退屈しのぎとして大伯母は効果的に導入している。このゲームは具体的には次のようなものである。

Up and down the City Road,

In and out the Eagle. (p.112) (W. R. Mardale<sup>12</sup>)

(この詩の場合、大伯母は”e”から始まる詩をみつけるのは難しいからと Robin に助け船を出して”g”から始まる詩を暗唱させる。(p.113))

Grow old along with me. (p.113) (Robert Browning)<sup>13</sup>

Mary, Mary, quite contrary. (p.113) (Mother Goose)

Come unto these yellow sands. (p.113) (William Shakespeare)

Sing a song of sixpence. (p.113) (Mother Goose)

Sing me a song of a lad that is gone. (p.113) (Mother Goose)

Goosey goosey gander, Whither shall I wander? (p.113) (Mother Goose)

それぞれが自分の詩の知識をふりしぼってしりとりを続けるのであるが、その詩の種類は多岐にわたり、かつ詩行は必ずしも第一行ではなく、ひとつの詩全体を十分に知っていなければ引用できないものである。大伯母はゲームの形で子供達に詩を身近かに感じさせ、かつゲームで自分達の詩の知識を確認し、またでてきた詩を覚えさせているのである。大伯母が子供達に与えている詩にかんする知識は単に詩句の数だけではない。Naomi が “I will make you brooches and toys for your delight” (“Romance” by Robert Louis Stevenson) という一節を暗唱したとき、詩句を知っているという優越感からいかにも暗唱用という不自然に誇張した口調で始めたところ (p.114)、「そんな調子で暗唱するもではない。カモメよ、カモメよ、彼女の目をつつきだしておくれ」 (p.114) と Naomi の臆病につけこんだような脅かし方をする。ここには詩を大切にする大伯母の姿勢がみられる。それは、詩は知識としてその形式を知っているだけ、文字として記憶しているだけでは不十分であり、その本質は声にだして音声的美をも味わうものであるというものである。しかもその暗唱

は詩が有している意味、本質をひきだすためのものであって、暗唱者を自己満足的にひきたたせるためであってはいらないのである。ここにも大伯母の詩へのこだわりと愛着があらわれている。

D. その他 日常生活の出来事と関連しての詩への言及

大伯母はその詩への造詣、愛着から、日常生活の些細な出来事に関連して屡々詩を引用する。それは殊更に教育を意識してではなく、彼女自身の生き方そのものの表現である。例えば、Robin が Penny のつくる食事に不平をいって、アイルランドに来てから Pudding を一度も食べていないというと、それを聞きつけた大伯母は間髪をいれず、“Georgie Porgie, pudding and pie” (p.107) とマザーグースを引用する。また Naomi が遊び道具がないのでなにか買ってほしいというと、“Higglety, pigglety, pop! / The dog has eaten the mop : / The pig’s in a hurry, / The cat’s in a flurry, / Higglety, pigglety, pop!” (p.107) と引用して、Naomi の要求が常軌を逸していると言わんばかりに彼女の願いを却下するのである。

大伯母は他にも自らの行動の説明として詩を引用する。例えば、庭の手入れをしてハーブを植えることになった時、Penny が「庭の整備が完了したらなにを植えるの」(p.146) と訊ねると、大伯母は Rudyard Kipling 以下の詩を引用する。

Excellent herbs had our fathers of old——

Excellent herbs to ease their pain——

Alexanders and Marigold,

Eyebright , Orris, and Elecampane,

Basil, Rocket, Valerian, Rue

(Almost singing themselves they run)

Vervain, Dittany, Call-me-to-you——

Cowslips, Melilot, Rose of the Sun.

Anything green that grew out of the mould

Was an excellent herb to our fathers of old. (p.146) (by Rudyard Kipling)

しかもそれを植える時期については“The child that is born on the Sabbath day is bonny and blithe and good and gay”(p.146) と言って日曜日に苗床をつくるのである。

ほかにも月夜の晩に船でエビ捕りに行くときも、Edward Lear の“The Owl and the Pussy Cat”から“The Owl and the Pussy-cat went to sea / . . . With a ring on the end of his nose, His nose / . . . They danced by the light of the moon, The moon, / They danced by the light of the moon.” (p.158) と引用して船にゆられて海にでるのである。また漂着した島で Alex に薪を集めさせる前に、“They haven’t got no noses, ...”(p.170) という Chesterton の詩を引用して自分の鼻を使って、乾いた海草のにおいをかぎつけておいで

(p.170) と言う。他にも夜中に月がきれいだと、“the moon on my left and the dawn on my right. / My brother, good morning : my sister good night.”という Hilarie Belloc の詩を引用する。以上のように大伯母 Dymphna にとって詩は生活、人生そのもの<sup>14</sup>となっているのである。

#### IV

以上、*The Growing Summer* における詩の役割、位置付けを物語の展開との関連から考えてみた。この物語はその設定が現実に対する非現実、近代科学に対する前近代的民間知識、便利さ、都会に対する不便もしくは田舎、自然、子供達に対する年輩者、現代的学校教育に対する旧来の家庭教育といった対比、対立に基盤をおいている。この対比からアイルランドの大伯母、また彼女の住む家は現実離れした「魔女」、「妖精」の住む家、時間が問題にならない世界として子供達にとっての常識の前に立ちはだかる。そして言語も論理、理性の支配する散文ではなく、荒唐無稽であったり、意味を否定するような詩、韻文が支配するのである。詩は当初、子供達と大伯母との違いを強調し、理解を妨げるものであった。しかし Reenmore という不可思議な世界、不可解な詩を駆使する大伯母に親近感を抱かせる契機をもたらすのもまた詩であった。ここに詩という言語芸術の特性があるといえる。日常の生活のなかでは一見無用にみえる詩が、日常生活を送る人々の本質を捉えているという点である。それ故にこの本質を共有している人間は、詩という言語芸術に心ひかれ、またその美を享受することができ、共感する詩を通して互いに理解することができるということをこの物語のなかの大伯母、子供達が示し、また物語のなかでの詩が物語という制約をこえて読者の心に直接語りかけてくるのである。*The Growing Summer* は登場人物のみならず、その詩をもって読者をも豊かにしてくれる佳作であるといえる。

#### 注

1. 斉藤勇 「イギリス文学史」 1981 研究社 東京
2. 平野敬一 「マザーグースの唄」 1972 中公新書 東京
3. 原田清人、原晶 「児童文学概論」 1971 建帛社 東京
4. 藤野紀男 「マザーグース案内」 1987 大修館 東京
5. *The Oxford Book of Children's Verse* London
6. 高橋康也 「ノンセンス大全」 1981 晶文社 東京
7. ユリイカ 対談 「ノンセンスの復権」 東京
8. ユリイカ 対談 「ノンセンスの復権」 p.117 東京
9. 大伯母の話しぶりの特徴の例を以下にあげる。  
繰り返し：Clutter, clutter! (p.44)  
Get out. Get out. (p.47)  
Help yourselves, children, help yourselves. (p.58)  
Splendid! Splendid! (p.64)

Come along. Come along. (p.65)  
Come along, child. Come along. (p.94)  
Why, child? Why? (p.94)  
True. True. (p.94)  
Good. Good (p.94)  
Come in. Come in. (p.95)  
Quiet, child. Quiet (p.95)  
Find it, dear boy, find it. (p.118)  
Splendid! Splendid! (p.131)  
Hurry! Hurry! Hurry! (p.144)  
Come along. Come along, we are going to sea. (p.155)  
I haven't, dear boy, I haven't. (p.155)  
To sea! To sea! Ahoy! Ahoy, off to sea we go. (p.156)  
Yes, dear boy, yes. (p.156)  
Bravo, dear boy! Bravo! (p.179)  
Splendid, dears! Splendid! (p.194)  
Quick! Quick! (p.203)

頭韻: Tiffs and tantrums, ... (p.43)

Bolts and bars! (p.81)  
Jigs and japers! (p.93)  
What a wibbly-wobbly lot you are. (p.117)  
The child that is born on the Sabbath day is bonny ane blithe and good and gay. (p.146)  
Fripperries and fancies! (p.205)

倒置: Wonderful all these modern inventions. (p.83)

So off you go to bed. (p.84)  
To sea! To sea! Ahoy! Ahoy, off to sea we go. (p.156)  
So should I. So should I. (p.172)

呼びかけ: We are going to Reenmore, dear. (p.45)

Help yourselves, children, help yourselves. (p.58)  
Are you a savage, child? (p.63)  
That's a fallacy, child. (p.66)  
How kind of you, dear boy. (p.83)  
Goodness, child! (p.93)  
Come along, child. Come along. (p.94)  
Why, child? Why? (p.94)  
Quiet, child. Quiet (p.95)  
Now don't stand about, child. (p.97)  
Find it, dear boy, find it. (p.118)  
I haven't, dear boy, I haven't. (p.155)  
Yes, dear boy, yes. (p.156)

10. William Allingham 本文では Allington とされている。

11. *The Growing Summer* p.171では夜中に漂着した島で海にはまった Robin の体を温めるために

大伯母は踊ろうという。重ね着をする衣服がないからというだけではなく、月が出て美しい夏の夜にはもっと何度も漁にでたいものだ (p.171) という言葉からもうかがえるように、彼女は自然と呼応してその心が昂揚して踊りだしたい思いを強くしているとも思われる。この夜、彼女は焚き火にくべるものを集めに行くにも、また戻ってくるのも弾んだスキップをするのである。自然に感応する大伯母は、しかし同時に人の心も深く理解することができることを随所で明らかにしている。ただ彼女にとっては他者に対する過剰な配慮や優しさ、親切は人間がつくりだし、互いに与えあうことに意味をみているだけで、自然のレベルでは何の意味も持たないが故に彼女も表現しないのである。大伯母には人間よりも自然のほうが近い存在であるようである。

12. W.R. Mardale, *Nonsense Verse*, p.104
13. "Rabbi ben Ezra" by Robert Browning
14. "Mother Goose"をはじめとして本書に引用される詩は断片的にはあるが28にものぼり、その著者は分かるだけでも William Shakespeare, Lord Alfred Tennyson, Robert Browning, Elizabeth Barnett Browning, Edward Lear, Lewis Carroll, Rudyard Kipling, Robert Louis Stevenson, William Allingham, W. R. Mardale, Hilaire Belloc, Cecil Francis Alexander と多彩である。

#### 参考文献

- 斉藤勇 「イギリス文学史」 1981 研究社 東京  
高橋康也 「ノンセンス大全」 1981 晶文社 東京  
平野敬一 「マザーグースの唄」 1972 中公新書 東京  
原田清人、原晶 「児童文学概論」 1971 建帛社 東京  
藤野紀男 「マザーグース案内」 1987 大修館書店 東京  
*The Oxford Book of Children's Verse* London  
対談「ノンセンスの復権——マザーグースと現代詩」 高橋康也、谷川俊太郎、長谷川四郎、林光  
1973 ユリイカ収載